

小児科

《概要》

今年度の陣容は、昨年度に引き続き、常勤医 4 名、後期研修医 1 名、計 5 名である。大阪府の施策である小児科医診療補充事業は今年度で終了するが、大阪府立母子保健総合医療センターから、新生児科医の当直という形で平日月 4 回診療の補充がなされたことは、我々にとって、非常に大きな助けとなった。

外来診療は、例年通り、一般外来(月曜のみ 2 診制、火～金は 1 診制)、慢性外来、1 ヶ月健診、生後 2 週健診、専門外来として循環器外来(第 2 金曜、完全予約制)、小児神経外来(第 2・4 火曜、完全予約制、今年度末で閉鎖)を行っている。予防接種は、RS ウイルスワクチン、他院で接種出来ない児を対象にインフルエンザワクチンの接種を行なっている。

泉州二次医療圏における小児救急医療体制に関しては、2006 年 11 月 3 日にオープンした泉州北部小児初期救急広域センター(日曜、祝日、年末年始、の 9:00～22:00、土曜の 17:00～22:00)がその機能を維持している。入院が必要と思われる患児は、その診療時間帯に後送病院として、輪番制で行っている従来の泉州地区 7 病院(和泉市立病院、泉大津市立病院、市立岸和田市民病院、岸和田徳洲会病院、市立貝塚病院、りんくう総合医療センター、阪南市民病院)に紹介され、そこで最終的に入院の要否が決定される。また、消防隊からの救急車による搬送も当番の輪番病院に集められる。広域センターの終了後、23 時以降は、その日の輪番病院で従来の夜間小児救急が行われている。当院の小児救急輪番担当日は、偶数週の日曜日 17:00～23:00 が広域センターからの後送病院担当、同 23:00～翌 6:00 が一次救急診療対応時間帯である。

周産期医療の中心は、NICU(neonatal intensive care unit)の運営である。大阪府内におけるハイリスク妊娠・分娩および新生児の診療に対応すべく、当院産婦人科は産婦人科診療相互援助システム(OGCS)、小児科は新生児診療相互援助システム(NMCS)に参加し、泉州地区周産期医療の活動拠点となっている。OGCS からは緊急母体搬送の受け入れ、NMCS からは疾病新生児や早期産児の搬送を受け入れている。2001 年 9 月以降、NICU への早産児受け入れ基準は、在胎 25 週以上、出生体重 500g 以上とし、本格的な NICU 稼働への態勢を継続している。昨年度に設立された泉州広域母子医療センターも順調に機能しており、当初想定した年間分娩数を消化しているが、GCU を拡張できたことによって、NICU をより効率よく運用することができている。また、母体搬送も、より早い時期の切迫早産を呈する症例の受け入れが可能となっている。

《実績》

昨年度一年間に外来を受診した患者の延べ数(救急外来受診患者を除く)は 8,145 人、月平均約 678 人で、今年度は年間約 700 人の増加に転じた。救急外来の受診患者延べ数は 561 人と昨年度とほぼ同じ人数であった。一昨年度の新型インフルエンザのような極端な感染症の流行がなかったためであろう。表 1 に救急外来受診児数を示す。17～23 時は、泉州北部小児初期救急センターの後送病院および救急搬送症例の輪番病院として機能している。それ以降は、一次救急にも対応している時間帯である。二次救急時間帯はそのような理由から、受診児数 137 人中、入院症例も 11 人(15.1%)、救急外来受診児全体の 2.0%と高めであるが、一次救急の時間帯では軽症例が圧倒的に多く、入院例はわずか 10 人(2.4%)、救急外来受診児全体の 1.8%にすぎず、この傾向は例年どおりである。救急外来か

らの入院例 21 人は、小児科一般病棟入院患者 227 人(後述)に占める割合は 10.2%であった。

NICU の入院統計を表 2 に示す。泉州広域母子医療センター開設後、入院数は 100 人前後を維持しており、今年度は比較的入院数が多く、113 人であった。新生児医療センターは、現在 NICU6 床、GCU6 床での運営である。当初、GCU を 12 床でスタートする予定であったが、助産師、看護師の不足により 6 床となった経緯があるが、現状 6 床でその機能を果たしていると思われる。今年度の入院数 113 人中、極低出生体重児は 22 人(19.5%)、うち超低出生体重児は 7 人(6.2%)、人工換気療法もしくは呼吸補助装置の使用は、全入院児の約 1/3 に施行されており、真に集中治療を必要としている症例が多く入院していることを示している。地域周産期センターとの位置づけではあるが、内容的には総合周産期センターに見劣ることのない医療を提供している。母体搬送は若干減少し、院内出生 80 人中、28 人(35.0%)が母体搬送後の出生であった。とはいえ、やはり OGCS もその機能を十分に果たしていると思われる。この年、周産期センターでの死亡例は 3 例(表 3)、3 例ともアプガー点数は極端に低く、3 例目は臍帯血管断裂による出血性ショックでなすすべなく死亡した。1 例目、2 例目はそれぞれ重度脳室内出血、胎盤早期剥離に基づく極めて予後不良な状態に陥り、集中治療を続けていくことの是非が問われた症例であった。幾度となくご両親との面談を繰り返し、また NICU 内で児のケアに携わっているメンバーを含めて、カンファランスを行い、「赤ちゃんの幸せとは」をテーマに、スタッフ一同診療を継続した。第三者的な立場から、大阪府立母子保健総合医療センター臨床心理士の水田由子氏を招き、診療に参加していただいた。結果的に、症例 1 は児自体の疾病に基づく状態のさらなる悪化のため死亡したが、症例 2 は脳波が平坦な状況が持続し、計画的に人工呼吸器からの離脱を行い、ご両親の腕の中で生後 142 日に死亡となった。NICU という医療の場では避けて通れない問題ではあるが、人同士のコミュニケーションがいかに大切であるかを再認識した。

小児科一般病室の入院患者数は延べ 205 人。昨年に比して 22 人の減少であった。表 4 に入院児の主診断を示す。例年通り、気管支喘息、肺炎、喘息様気管支炎、ウイルス性腸炎など急性感染症が大部分を占めていたが、周産期センター開設以来、新生児黄疸の光線療法治療入院の割合が増加しており、この傾向は今年度も同様であった。病診連携によって紹介された患者の入院数は 35 人、入院児全体の 17.1%であり、昨年度よりさらに低下した。

表1. 救急外来受診児数

平成23年度 (23年4月～24年3月)

	2次救急 (17時～23時)	1次救急 (23時以降)	計
受診者数	137	424	561
入院者数	11	10	21
救急搬送	91	37	128
紹介者数	20	3	23

表2. NICU入院数

(2011.4～2012.3)

出生体重 (g)	院内出生	母体搬送	院外出生	計	IPPV	N-DPAP
<500	0		0	0		
<1,000	7	6	0	7	5	6
<1,500	15	6	0	15	8	9
<2,000	24	10	3	27	10	11
<2,500	19	4	9	28	9	9
≥2,500	15	2	21	36	8	5
計	80	28	33	113	40	40
在胎期間 (週)	院内出生	母体搬送	院外出生	計	IPPV	N-DPAP
<25	0		0	0		
<28	5	4	0	5	5	4
<30	8	4	0	8	6	8
<32	9	3	0	9	7	6
<34	17	8	2	19	5	7
<37	25	9	10	35	6	8
≥37	16	0	21	37	11	7
計	80	28	33	113	40	40

表3. 周産期センターでの死亡例

(2011.4～2012.3)

出生年	出生場所	性別	出生体重 (g)	在胎期間 (週)	アプガー点数		死亡日齢	剖検	診断名
					1分	5分			
2012	院内	男	1,120	27.1	2	2	17	なし	IVH IV、GBS 敗血症、PPHN、循環ショック、RDS、PDA
2012	院内	女	2,440	37.3	0	0	142	なし	胎盤早期剥離、重度新生児仮死、低酸素性虚血性脳症
2012	院内	男	1,483	30.2	0	1	1	なし	重度新生児仮死、臍帯ワルトンジェリー欠損、臍帯血管断裂、出血性ショック

表 4. 入院児主診断名

感染症・寄生虫症	
ロタウイルス性腸炎	3
カンピロバクター腸炎	1
細菌性腸炎	2
細菌性胃腸炎	1
急性ウイルス性胃腸炎	1
ウイルス性腸炎	1
感染性胃腸炎・詳細不明	5
百日咳	1
敗血症性ショック	1
溶連菌感染症	1
マイコプラズマ感染症	3
ウイルス性髄膜炎	1
ヘルペスウイルス性歯肉口内炎	1
ヘルパンギーナ	1
RSウイルス感染症	11
血液・造血器・免疫疾患	
シェーンライン・ヘンッホ紫斑病	2
特発性血小板減少性紫斑病	3
高サイトカイン血症	2
内分泌代謝疾患・栄養障害	
低血糖	1
成長ホルモン分泌不全性低身長症	2
プロピオン酸血症	2
高アンモニア血症	1
脱水症	1
循環器疾患	
肺高血圧症	1

神経系・感覚器疾患	
無菌性髄膜炎	1
急性横断性脊髄症	1
部分てんかん	1
てんかん	1
運動失調	1
熱性痙攣	3
複雑型熱性痙攣	1
痙攣重積発作	3
痙攣発作	1
体重増加不全	2
皮膚・皮下組織疾患	
蜂窩織炎	1
頸部化膿性リンパ節炎	1
多型滲出性紅斑	1
筋骨格系・結合組織疾患	
川崎病	10
川崎病性冠動脈瘤	2
泌尿・生殖器疾患	
尿路感染症	3
周産期疾患・先天異常・保育	
新生児臍炎	1
新生児溶血性黄疸	1
早産に関連する新生児黄疸	1
低出生体重児高ビリルビン血症	6
新生児黄疸	12

呼吸器疾患	
インフルエンザ菌性咽頭炎	1
インフルエンザ菌気管支炎	1
インフルエンザ A 型	2
インフルエンザ脳症	1
アデノウイルス咽頭炎	1
アデノウイルス肺炎	1
肺炎球菌肺炎	1
マイコプラズマ肺炎	19
その他の肺炎	15
急性上気道炎	12
アデノウイルス扁桃炎	1
扁桃炎	2
急性気管支炎	2
RSウイルス気管支炎	1
RSウイルス細気管支炎	13
喘息性気管支炎	14
気管支喘息	9
急性呼吸不全	1
先天奇形・変形・染色体異常	
肥厚性幽門狭窄症	1
消化器疾患	
急性カタル性虫垂炎	1
腸重積症	3
紹介入院率 35/205=17.1%	

《業績》

(1) 学会研究会発表 (2011.4～2012.3)

番号 整理	演 題	発 表 者	学 会 ・ 研 究 会 名	年 月 日
1	血糖コントロールに難渋した高インスリン血性低血糖症の新生児例	阪上美寿々 岸本加奈子 秋田大輔 山本昌周 和田芳郎 住田 裕	第14回泉州小児科症例勉強会 岸和田市	2012.2.9

(2) 論文 (2011.4～2012.3)

番号 整理	題 名	著 者	著書・誌名	巻(号)	ページ	年
1	低カルシウム血症・低マグネシウム血症	住田 裕	周産期医学 2011	41 巻 増刊号	748	2011
2	血中リン異常症	住田 裕	周産期医学 2011	41 巻 増刊号	750	2011